慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ジャン・ゲプサア入門
Sub Title	Jean Gebser : Eine Einführung
Author	海老坂, 高(Ebisaka, Takashi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2011
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・文学 (Hiyoshi-Studien zur Germanistik). No.47 (2011.) ,p.254(19)- 272(1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	小林邦夫教授 退職記念号 = Sonderheft für Prof. Kunio KOBAYASHI
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20110331-0272

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ジャン・ゲプサア入門

海老坂　高

Jean Gebser 死して三十余年、私たちが置かれている基本的状況は何も変わってはいない。依然として私たちは「時代のかわり目」(5-2, 18) に立っているのである。経済総力戦下における全体への個人の隷属。技術を駆使した物質的繁栄の前で色褪せる伝統的精神的諸価値。根原 (Ursprung) との繋がりを失った精神が専門化、断片化の迷路の果てに行きつく無明ないしは生命力の枯渇。知の最前線に立つ西洋の科学者たちが、相次いで古色蒼然たる東洋の学堂に馳せ参じる光景を前にして、私たちは危機の重みを感じないわけにはいかない。

ジャン・ゲプサアが現代の学問的動向における「革命」(1, 173) の文明論的意義を俯瞰した『西洋の変貌』(Abendländische Wandlung)[1] を発表したのは、世界大戦の破局的展開が不安と憎悪と絶望の闇を現出していた一九四三年のことである。

「時の終わり」(3, 399) が意識されるとき、錯綜する個々の事象を超えた歴史の行方が注視される。個々の事実はその背後の見えざる大きな運動の表徴とみなされる。歴史哲学の誕生である。ヘルダー、ヘーゲル、シュペ

ングラー、そしてゲプサアに通底するのは、個人の視界には収まらぬ広大な対象を扱う際に避けがたい個別的な誤認にもかかわらず、その障害を乗り越えたところで獲得される巨視的直観である。この歴史的直観は、何ものにもまして未来にかかわる。けだし未来とは希望の投影である。かれは一九四一年に書いている。

「（略）このような規模の非人間性と破壊的暴力をこれ以上は無理なほど前面に押し出した今の時代においては、それに見合う規模の人間性と建設的な善意が別の次元で対応していなければならない。」（7, 282）

ゲプサアの人間理解の根本は、意識の複層的理解にある。近くにあるものと遠くにあるもの、顕われたものと隠れたものの遠近法。主著『根源と現在』（Ursprung und Gegenwart　第一部一九四九年、第二部一九五三年）で示導動機として据えられる「パースペクティヴ」（Perspektiv）の概念はゲプサアの思考の中心に位置する。レオナルド・ダ・ヴィンチ以降、決定的となった西洋人の意識のあり方としての「パースペクティヴ」は、西洋の境界を越えて世界に広がり、「技術」（Technik）による自然の支配を可能にしたが、技術化による幸福追求の夢はもろくも潰え、今や技術の進歩は満足を与えるというよりも、むしろ懐疑と不安をかきたてるのである。技術とそれを支える学問は、元をただせば、西洋に由来する「パースペクティヴ」という意識構造の所産にほかならない。

ヴィーコ以来、奉じられてきた、歴史は間断なく前進するという思想はついには「西洋の没落」という観念に行きついた。しかし時代の危機とは、巷間において理解されるような、「病」（5-1, 231）の結果ではない。罹病の意識を抱くとき、すでに回復の運動ははじまっている。それは隠れたものが顕在化する過渡期の過程である。窮地に立たされた意識は新たに「あるもの」を組み入れる。ゲシュタルト理論が示すごとく、この「あるもの」はたとえ大海の一滴にすぎぬにしても、意識構造の根本的再編（たとえばケーラーの「洞察」）を引き起こすこ

とができる。そこに新たな視野が開かれるのである。

この全面的な、断絶を伴う意識の変化を、ゲブサアは「突然変異」(Mutation)[11]と呼ぶ。それは歴史上、一回限りのものではない。従来の意識のあり方では環境の変化にもはや十分に対応できなくなる時代には、繰り返し生起する。古代世界では紀元前五世紀ごろのギリシアにおいて、神話的意識からの跳躍として経験された。神話的意識は精神的(メンタール)(mental)意識へと変容することで危機に対処した。同様の跳躍は一三世紀のヨーロッパで繰り返された。そして現在はその精神的(メンタール)意識が危機を迎えているのである。

件の「革命」、すなわちアインシュタインの相対性理論、プランク以降の量子物理学、ラインの超心理学、デ・ブリースの突然変異説、ヘルマン・フリートマンのゲシュタルト理論、ホールデンの生物学、そしてフロイトにはじまりアードラーとユングにより展開される深層心理学は、袋小路に陥った精神的(メンタール)意識が根本的な変容を経て、新たな境地に達する徴候にほかならない。[12]

それでは世紀の変わり目にはじまる「革命」の歴史哲学的意味とはどんなものか。それは一言でいえば、主客の分離・対立の克服である。ヨーロッパではルネサンスにはじまる「パースペクティヴ」の意識は五〇〇年間にわたって主体の客体からの独立と分離を押し進め、一方では近代文明の原動力たる自然支配の知識を獲得したが、他方では詩人リルケを苦しめる実存の「不安」(Sorge)を招来することになった。この「死に至る病」は、主体に対－峙する客体の沈黙の産物であり、世界から断絶し孤立したまま現－存在するようになった人間のあり方に由来するがゆえに構造的である。それは、意識の構造を全面的に転換して、断ち切られた関係性を復活することなしには解消されえない。

一九世紀の後半から西洋社会に勃興したスピリチュアルな運動は、世俗的な心霊主義から科学的な「心霊研究

協会」（The Society for Psychical Research）まで、この「死に至る病」に対する個人の宣戦布告だったと解しても過言ではあるまい。時代を席巻したコミュニズムとファシズムは、個人の精神的無化を前提とした、社会的政治的なレベルでの反抗である。しかし、精神性をすっかり抜き取られた死せる物質に再びいのちを蘇らせようとする試みは、挫折を繰り返してきた。ウニオ・ミュスティカであれ、民族共同体の復活であれ、性急な形で魔術的ないしは神話的次元に解決策を求めるならば、環境への適応を通して進化してきた意識の歩みを否定することになるからである。[四] 個人の主体性に活路を開こうとする実存主義は、主体性が現在の意識の産物である以上、対症療法にとどまる。真の解決は、新たな環境に適応する、意識の地平の革新以外にはないが、それがどのようなものであるかを正確に理解するためには、意識の展開史を辿る必要がある。[五]

そもそも意識の進歩とは、意識の枠組みである時間・空間構造の革新にほかならない。意識は「根源」の「太古的構造」から出発する。この段階の意識は深い眠りにつき夢を見ない。万有はまったき同一性に貫かれている。主客の対立はおろか、時間・空間もない。世界は内も外もなく、無意識の心霊に満たされている。聖書の楽園が示すように、人間と万有のあいだには何の問題も生じない。「パースペクティヴ」は零次元の無である。やがて意識の覚醒がはじまると、同一性は破られて、「単一性」（Unität）に移行する。この魔術的段階において意識はなかばまどろみ、なかば覚醒している。時間も空間もまだ未分化ではあるが、「パースペクティヴ」への運動がはじまるので、一次元の「前パースペクティヴな」（vorperspektivisch）段階と呼ばれる。紀元前七世紀に制作されたと推定される、コリントの香油容器がある。その表面には絵が描かれており、ロゼッタ模様や鳥などの形象で隙間なく埋め尽くされた「海」のなかにアルテミスが「浸っている」。あるいは「絨毯の中に織り込まれている」とも見える。この絵柄には魔術的意識の状態が典型的な形で現れている。未分化の意識は世界のなかに

「織り込まれて」おり、時間は「自然の時間」(Natur-Zeit) としてまどろみのなかで「体験」(Erlebnis) されるにすぎない。(2, 99f)

魔術的段階の克服は外界（世界）と内界（魂）を区別する神話的意識の登場によってはじめて可能となる。魔術的段階では「体験」によって無意識に統一されていた全有には、世界と魂というふたつの極が生まれる。「体験」は「経験」(Erfahrung) に移行する。「体験」に映じているのは世界の絶えざる流動だが、「経験」はそれを、両極をめぐる周回運動に整序する。四季や星座など自然の周期性を反映した「亜時間」(Zeithaftigkeit) の意識が誕生する。この円環的時間は固定した方向をもたず、はじまりもなく終わりもない。しかし反復の作用を通して意識は運動を固定化できるようになる。想像力が芽生え、神話的形象が誕生する。二次元の「非パースペクティヴな」(unperspektivisch) 神話的意識には、客体化された奥行きのある空間はまだ存在しない。ヴォリンガーが指摘するように、古代エジプト芸術は三次元を量的に理解するのみで、生の緊張を伴う質的空間の観念を欠いている。ルネサンス以前のヨーロッパもこの段階にある。空間は、母の胎内を示す空洞か、あるいは屹立するファルスたる列柱のあいだを充たす単なる「間」(Zwischenraum) であるほかない。無分節の「内部存在」(In-Sein) の庇護からいち早く抜け出したプラトンは、だから洞窟を比喩として語ったのである。(2, 36f.)

神話的段階は精神的（メンタール）段階によって克服される。ここで初めて三次元空間が獲得される。それとともに時間の抽象化がはじまる。非合理的な両極性思考、「あれも、これも」という「オケアノス思考」(okeanisches Denken) に代わって、合理的な二元性思考、「あれか、これか」という「ピラミッド思考」(Pyramidendenken) が登場する。この転換は紀元前五〇〇年頃、古代ギリシア、正確にはアテナイを中心とする哲学の勃興において明らかになるが、それはヨーロッパにおいて、一三世紀中葉から「パースペクティヴ」の獲得という形をとって繰り返さ

れる。

トゥルバドゥールの「抒情的自我－詩」は世界と詩作する人間のあいだに、いきなり深淵を切り開いてみせた。集合的無意識の夜が明けようとしていた。ペトルス・ヒスパヌスがアリストテレスの霊魂説を用いてヨーロッパ初の心理学概説を試みるのもこの頃である。一二八三年にウェストミンスター宮殿に初めて設置された公開の時計台は、時間の視覚化、空間化に貢献した。アリストテレスに依拠するトマス・アキナスの世界解釈、ドゥンス・スコトゥスによる意志と感情の復権は、合理性と時間性を抜きにしては語れない。（2, 39）

ゲプサアによれば、「パースペクティヴな」意識の最初の有力な証拠文献は、ペトラルカが一三三六年にアウグスティヌス派の神学教授フランチェスコ・ディオニギに宛てて書いた手紙である。アヴィニョンの北東、ローヌ河がフランス・アルプスとセヴナンの丘陵地帯を分かつところ、優美な稜線をプロヴァンスの蒼穹に走らせる孤峯モン・ヴァントゥ。三二歳の詩人は、標高二〇〇〇メートルの頂上からの光景、すなわち足下の雲海を透かしてきらめくローヌ河、白波をあげる地中海の測りがたい広さ、リヨンの山嶺……をはっきりと意識する。その圧倒的な印象はかれの魂を揺さぶらずにはおかない。「風景の発見」（2, 40）がはじまる瞬間である。魂からは独立した空間の、現実に即した合理的な価値づけは一九世紀の唯物論に至るまで――意識の強化は「物象化」（Dinglichung）の強化にほかならない（2, 205）――推し進められることになるが、一五世紀初頭のアンブロージオ・ロレンツェッティとジオットには、はやくも「非パースペクティヴな」世界からの離反が見てとれる。

チェンニーニからアルベルティ、ピエロ・デル・フランチェスカを経てレオナルド・ダ・ヴィンチにおいて大成される遠近法――「パースペクティヴ」は、絵画の領域を超えて、新たな意識段階一般の本質をなす要素である。コペルニクス、ケプラーの天文学、コロンブスの新大陸発見、ヴェサリウスの解剖学、ハーヴェイの血液循

環説は、いずれも平面的世界観からの離脱を示している。三次元の空間意識は外界の合理化、客体化を進めると同時に外界に対峙する自我の意識を強化する。空間の強調は唯物論と自然主義において頂点に達する。「物象化」の対象は時間にも及ぶ。いまや日常生活においては空間化、物質化された時間の所有が肥大化した自我を悩ましている、「時は金なり」と。二元論に基づく時間の客体化はドゥンス・スコトゥス以降ロックとカントに至るまで進められた。客体化された時間はさらにベルクソンにおいて、事物の客観的時間と魂の主観的時間に区分されることになる。野心的な哲学はさらにこの道をつき進み、ついには「時間を合理的に粉砕する」「無の無」(Nichtendes Nichts) を導入するに至る。しかしそれは精神的(メンタール)構造を神話的構造の「否定的戯画」ととり違えることで、「無意識のうちに神話的なものに退落する」危険を孕んでいる。ハイデガーの『存在と時間』は、その紛れもない症例ではないのか。(2, 259ff.; 3, 547)

これまで各意識段階の末期には、次の段階を予示する現象が生起してきた。たとえば、魔術的段階の終わりには、四季の儀礼、天体の運行の記録、暦の制作が見られるようになる。神話的段階の終わりには、「ネキア」(Nekyia) と呼ばれる、魂の暗部、すなわち無意識の意識化が試みられるようになる。ゼウスの頭から飛び出す知恵の女神アテナの神話的形象は来るべき意識の覚醒をよく表わしている。(2, 107; 2, 123f.)

相対性理論、量子物理学および量子生物学、精神身体医学、深層心理学――これらの諸学は、いずれも「空間と時間の新たな把握」という同じ課題に取り組むことで、精神的(メンタール)段階を乗り越える段階を示唆しているのである。意識状態の変革は学問の領域にとどまらない。新たな意識段階の理解は「徐々に」(2, 60) しか進まないから、現在のような過渡期にあっては、時代を先取りする芸術活動の役割はことさら重要になる。当然のことながら、新たな現象に既存のスケールを当て嵌める誤解も生じる。存在論の範疇を用いた四次元の分析（ニコライ・ハル

トマン）、ストラヴィンスキーの時間概念を二元論に還元する解釈（アドルノ）はその代表例といえる。（3, 457; 3, 604）

ゲプサアの意識構造理論においてもっとも重要な概念は「透徹」（Transparenz）である。それは合理化、抽象化された「表象としての世界」を克服する意識の新たな段階の本質的特徴である。つまるところ意識の歴史とは、時代とともに視力を増してゆき「透徹」に至る進歩の歴史である。興味深いことに、『リルケとスペイン』（Rilke und Spanien）にはじまり『根源と現在』に結実するこの思想は、成立時期からいっても、内容からいっても、テイヤール・ド・シャルダンの宇宙進化史の構想に重なる。「だから生命の世界の歴史とは、宇宙のなかをいっそう深く見とおす力がしだいに研ぎ澄まされ完成されていく眼の形成史といえるだろう。」（『現象としての人間』一九五五年）[六]。もっともカトリックの立場にあるテイヤールは、意識の頂点として「透徹」の代わりに「オメガ点」を置くのではあるが。一九六六年に出版された『根源と現在』第二版の序文においては、テイヤールとともに、インドの思想家オーロビンド・ゴーシュが称揚されている。テイヤールにとっては科学の世紀におけるキリスト教の基礎づけが目的であるのに対し、ゲプサアが注目するのは西洋－東洋の相補性である[七]。（2, 18f.）

さて、現在の意識段階が直面する問題の真の克服はどのようにもたらされるのだろうか。ゲプサアによれば、弁証法的な意味における「揚棄」（aufheben）は根本的解決をもたらすことができない。「揚棄」は対立および二元性を本質とする「パースペクティヴな」意識段階が生み出した方法だからである。意識の発達史を振り返るならば、意識の次元で起こる次の跳躍は、三次元を超えた四次元の時空一体構造を実現することになろう。この来るべき「アパースペクティヴな」（aperspektivisch）意識の段階は「統合」（Integral）と呼ばれる。これまでに通過してきた諸段階は、空間的比喩を用いるならば、「パースペクティヴな」意識の下に重層的に堆積している。

これらの古層が依然として潜在力を有している事実は、頻繁に繰り返される復古的精神運動を見れば明らかであろう。現代芸術がプリミティブなものに強い関心を抱くのも、現代人がときとして魔術的・神話的観念に囚われる由縁もここにある。「統合」とは、これらの複層構造を「体系化」することではない。隠された諸層の構造と関連をくまなく「透視し」(diaphanieren)、それらの潜在力の支配を免れるとともに、それらを自在に使いこなすこと、それが「統合」によって開かれる境地である。(八)

「アパースペクティヴな」意識において、空間と時間は、もはや世界を成立させるところの互いに独立した不変の枠組みとしては捉えられない。時空一体の世界把握に基づく、新たな意識の再体制化が起こる。空間化、抽象化された時間においては、もはや「起点」(Anfang) は二度と戻ってはこない。神話的円環構造は否定され、時間は一方向に等速で進む(「時計の時間」)。しかし具体性を獲得する新たな時間意識においては、忘れられた「根源」が再び姿を現す。はじまりとして一度は消え去った「根源」は「現在」において回復される。キルケゴールの「瞬間」、ロバチェフスキーやリーマンによる非ユークリッド幾何学の探求、ベルクソンの『時間と自由』、アインシュタインの相対性理論、フッサールの「純粋意識」、ハイゼンベルクの不確定性原理、ニールス・ボーアの相補性原理、ウジェーヌ・ミンコフスキーの「生きられる時間」、ヴィクトール・フォン・ヴァイツゼッカーの「ゲシュタルトクライス」、ユングの共時性概念は、それぞれ立場を異にするとはいえ、いずれも新たな意識状態の重要な予告なのである。(九)

空間と時間の概念の革新は、芸術創造の場において、より鋭敏な形で現れてくる。アーノルト・シェーンベルクは初期の理論的著作においてはやくもアインシュタインを参照しているが、相対性理論の登場以前に書かれたドビュッシーの作品の調性は、もはや線的ではなく、すでに球面的特徴を示している。建築においては、均整の

体系が放棄され、時間の契機を導入した動的空間が考えられるようになる。機能主義（サリヴァン、アードラー）とは空間構成における時間の導入にほかならない。ヴァルター・グローピウス、ミース・ファン・デア・ローエ、フランク・ロイド・ライト、ル・コルビジェの作品は、内と外を分かつ壁を撤去した「開かれた空間」を構成するが、そこには二元論の克服が志向されている。（3, 606; 3, 616f.; 3, 619）

新たな意識段階をもっとも鮮やかに印象づけてくれるものは絵画であろう。周知のように、ドラクロワがシュヴルールの補色原理に関する講演に衝撃を受けたのは一八二八年のことであった。フュスリとジェリコはすでに因習的な絵画の原理に向けて反抗をはじめていた。だが、新たな展開が明瞭になるのはセザンヌにおいてである。セザンヌは空間を平面ではなく、曲面として捉えた。セザンヌが非ユークリッド幾何学を知っていたか否かは問題ではない。かれが画家の直観と論理に従って球面に到達したことが重要なのである。一八八〇年代には、はやくもセザンヌの視覚を継承する鋭敏な画家たち、ゴッホ、ゴーギャン、アンソール、ホドラーが現れる。（3, 626ff.）

絵画における先駆性はキュービズムにおいて決定的になる。キュービズムは時代の転換を明確に理解し、空間の克服を主張していた。ブラックは「帽子をかぶった婦人」（一九三〇年）と「サオ」（一九三一年）で、新しい時間概念を肖像画に導入している。ピカソの絵画は一瞥で対象全体を捉えることを可能にする。西洋の伝統において「観ること」（Anschauen）とは、ある特定の時点にある特定の場所から対象の一部を見ることであり、それは全体の把握を意味するわけではない。しかしピカソは、視点の移動という時間の流れを分断し、様々な視点がそれぞれ構成する諸像を一枚のカンバスにまとめて「同時に」提示する。それは神秘主義的直観とは異なるが、部分ではなく全体の描写を目指しているのである。このような表現は時間概念の革新なくしては生まれない。

(2, 61ff.)

「パースペクティヴな」世界では個々の部分しか見えなかったものが、「アパースペクティヴな」世界では全体として知覚されるようになる。時間の複雑な構造が抽象化されるのではなく、その隅々に至るまで一点の曇りなく意識に明らかになることによって。時間が純粋な物質ではない上は、四次元の時空において露わになる全体とは、単なる物質の集合ではなく、精神性を含むあるものということになろう。

以上、ジャン・ゲブサアの思想の素描を試みた。

ゲブサアは、統合意識による「アパースペクティヴな」段階の可能性を、とりわけ禅の「悟り」に見ているようである。禅はヤーコプ・ベーメのような西洋神秘主義の最高峰に比肩する宗教体験とみなされている。それはすでにヘルマン・グラーフ・カイザーリングの指摘したところであるが、ゲブサアはさらに一歩を進めて、西洋精神の未来の導き手にしようというのである。ここに、現在の西洋社会に広がった「ゼン」という波紋のはじまりを見てもいいだろう。さらに、いわゆるニュー・エイジ・サイエンスやトランス・パーソナル心理学における東洋趣味の端緒を見ることもできよう。[10] (4, 89)

たしかに、私たち日本人は合理的、因果的思考法のほかに、それとは異質の、禅の世俗化した技法ともとれる思考法を身につけている。しかしその自在性、ないしは「あれも、これも」が意識の新段階を画するとはとてもいえまい。「東は東、西は西」というキプリングの言葉は依然としてゲブサアにも当てはまる、もはや理解不能な隣人ではないにせよ。東西の対話はまだ開かれたばかりなのである。

私たちがゲブサアの指摘する時代の病を共有することは確かである。私たちの意識が精神的(メンタール)段階にあることも

認めてよいであろう。しかし精神的段階（メンタール）の終局にあるという歴史意識、さらには新たな時代の希望として語られる「空間からの自由」、「時間からの自由」というものが、西洋人と同様の強度と切迫さをもって私たちに感じ取られているかどうか。私たち日本人の意識の発展史が書かれるときではないだろうか。それは魔術的、神話的意識を引きずった情緒的な矛盾した記述や、西洋思想の牽強付会であってはならない。明晰な「パースペクティヴ」をもって構造を析出すること。時代の病の処方箋は私たち自身の意識のうちにある。

年譜（全集第七巻に基づく）

ゲプサアは一九〇五年八月二〇日ポーゼンに生まれた。

父親のフリードリヒ－ヴィルヘルム（Friedrich-Wilhelm）は法律顧問官であった。父祖は南チューリンゲンに発し、フランケンのゲーベゼー（Gebesee）に淵元するという。

五歳の時家族はブレスラウへ、さらに第一次世界大戦がはじまるとケーニヒスベルクへ引っ越した。大戦中、官を辞した父親がベルリンで弁護士を開業すると、家族もこの大都会へ引っ越した。大戦後ほどなく父が死去すると、ギムナジウムを中退し、ベルリンの銀行に就職した。一七歳であった。一九二四年から翌年にかけて、フンボルト大学の勤労学生として、グアルディーニの精神史と文学史、ゾンバートの国民経済学、ハーンの民俗学、ホルチュのヨーロッパ史などの講義を聴講した。修業年限があけるとともに銀行を退職、出版業にかかわるが、強度の抑鬱に襲われ、自殺を考えるようになる。一九三一年三月、ドイツを離れる。パリ、アヴィニョン、エクス・アン・プロヴァンス、バルセロナなどを経て、一二月にマラガに至る。一九三二年からトレモリノス、続いてマドリッドに居住する。スペイン共和国教育省のメンバーになる。

一九三五年、ガルシーア・ロルカらスペインの詩人たちとの交流がはじまる。ルイス・セルヌーダとともにヘルダーリンの詩一八編をスペイン語に翻訳し、雑誌に発表する。また翌年には『新スペイン詩集』の表題で、スペインの現代詩を独訳してベルリンの書肆から出版している。ロルカについては、かれがゲプサアの詩集のために描いたイラストを添えた追想録『ロルカと母たちの国』(Lorca und das Reich der Mütter)を一九四九年に発表している。

『リルケとスペイン』をスペイン語で書きあげるが、スペイン市民戦争の勃発で出版はとりやめになる。一九三六年八月、ロルカが逮捕され殺される。一〇月マドリッドを脱出する。ヴァレンシアでアナーキストに捕まり一日半拘禁される。スペイン人の友人の援助により銃殺を免れる。フランスへ逃れ、第二次世界大戦がはじまる一九三九年まで、パリに滞在し、ポール・エリュアール、アラゴン、アンドレ・マルローそしてピカソらと交わる。一九三九年八月三〇日、フランスからスイスへ脱出する。国境が閉鎖されるわずか二時間前のことだった。翌年『リルケとスペイン』(独語版)をチューリヒのオプレヒトから出版した。ゲプサアは、リルケがエル・グレコ体験とそれに続くスペイン旅行で回復する世界連関を「パースペクティヴ」の観点から解釈している。(一一)

一九四一年、テッシンに居住、翌年末にアスコーナに移る。ユング、ケレーニイ、ポルトマンなどエラノス会議の碩学たちとの交流がはじまる。一九四四年、母が多発性硬化症で亡くなる。その事実をゲプサアが知るのは八年後のことである。

一九四七年、チューリッヒの「応用心理学研究所」で講師を務める。五月七日から七月一六日まで一〇回にわたる講義「魂と精神について」(全集五巻所収)をおこなう。一九四八年ブルクドルフへ転居、一九五一年に市民権を得る。この年、マックス・ベンゼ、マックス・ブロート、グスタフ・ハルトラウプ、アルトゥール・マル

ヒ、ミッチャーリヒ、ボルトマン、ヴァルター・トリッチュ、カール・フリードリヒ・フォン・ヴァイツゼッカーとともにザンクト・ガレン商科大学の連続講演「新しい世界観、非パースペクティヴな時代の到来に関する国際討議」に招かれた。翌々年の第二回大会にも参加し、ダッラピッコラ、ゲーレン、ハイゼンベルク、ホルトゥーゼン、ミンコフスキーらとともに講演する。一九五三年一二月、ユトレヒトで開かれた第一回「超心理学研究国際会議」に参加。一九五四年一月、ラジオ・バーゼルが企画した「超心理学の問題」についての特集番組にヤスパース、ポルトマンと出演する。四月、サン・ポール・ド・ヴァンスで開かれた「超心理学研究国際会議」に参加。(二)

一九五五年八月末、内臓ヘルニアの手術を受ける。一九五七年五月、ミュンヒェンで共同講演会「新たに見えてくる世界」の冒頭発表者を務める。ゲルラッハ、ボルトマン、ハイヤー、フォン・ザーリスが参加した。

一九六一年三月から七月末までアジア旅行。インド、パキスタン、ネパール、ビルマ、タイ、カンボジア、中国、台湾、日本（東京、鎌倉、日光、京都、奈良、伊勢）を回る。鎌倉に鈴木大拙を訪ねる。旅行の見聞と思索は翌年、『アジア入門』にまとめられる。一九六八年には増補版が『アジアの異なる微笑』として出版される。一九六四年から翌年にかけての冬に、南北アメリカを旅行。(5-2, 140)

一九六五年、六〇歳記念論文集が刊行される。ベルン市から文学賞を授与される。

一九六六年一一月、緊急手術を受ける。『根源と現在』の脱稿以後、生活を支えるために続けてきた講演旅行に明け暮れる生活が終わりを迎える。病状は重篤だったが、奇跡的に命をとりとめる。しかし再び健康が戻ることはなかった。一九六七年、ザルツブルク大学の比較文化講座名誉教授に就任するが、病のために、講義はできなかった。一九六八年、『アジアの異なる微笑』出版。一九七〇年、『不可視の根源』出版。『根源と現在』第三

版出版。一九七一年六月、ヴェルナー・ハイゼンベルクを訪問。一九七二年一〇月、バート・ボルで開催された医学者会議（テーマは「不安の知覚」）で、結びの講演「根源的不安と根源的信頼」をおこなう。一九七三年五月十四日、『衰退と関与』の序文を書きあげた直後に自宅で逝去、享年六七歳。

注

括弧付引用は、Jean Gebser, Gesamtausgabe in 9 Bänden. 2. Auflage. 1999 Novalis Verlag AG Schaffhausen による。括弧内の数字は順に巻数、頁数である。この八巻九冊からなる全集の編成は以下のとおりである。第一巻：『西洋の変貌』、『文法の鏡』、『リルケとスペイン』、『ロルカと母たちの国』。第二巻：『根源と現在』第一部。第三巻：『根源と現在』第二部。第四巻：『根源と現在』注釈。第五巻の一および二：『根源と現在』についての講演と講話。第六巻：『アジアの異なる微笑』、小論集。第七巻：『休眠の歳月』、『夢の本』、詩、証言。第八巻：人名および項目索引。なお、ゲプサア六〇歳記念論文集『世界の透徹』（Transparente Welt. Festschrift zum sechzigsten Geburtstag von Jean Gebser. Hrsg. von Günter Schulz. Im Verlag Hans Huber Bern und Stuttgart 1965）の巻末に、詳しい書誌（Robert Alder 編）が収載されている。この論文集の主な執筆者は以下の通り。自然科学から、ヴェルナー・ハイゼンベルク、エッカルト・ハイメンダール、アドルフ・ポルトマン。人文科学から、ヘルベルト・キューン、ジャン・ルードルフ・フォン・ザーリス。法学から、ヴォルフハルト・フリードリヒ・ビュルギ、ハンス・マルティ。経済学から、フリッツ・マールバッハ、ルートヴィヒ・プレラー。医学から、グスタフ・リヒャルト・ハイヤー、アルトゥール・ヨーレス。

（一）　副題は「物理学、生物学、心理学における最近の研究成果の概要と現代および未来にとっての意義」。

（二）　ポルトマンは生物学に由来する、この人口に膾炙した言葉が、歴史哲学に転用される際に生み出しやすい「誤解」について注意を促している。歴史哲学において時代区分の表現として使われる「突然変異」は、生物学的にはその影響を知ることができない。アドルフ・ポルトマン「生命現象としての形態形成」。エラノス叢書9『言葉と創造』（桂芳樹訳）二四四頁以下　平凡社　一九九五年

（三）　ゲプサアの心理学への関心はフロイト以降の無意識理論に限られる。ゲプサアにとって深層心理学が意味深いのは、その臨床的実学性ゆえではない。新たな意識の次元を示唆するからである。カール・フォン・ヴァイツゼッカーが物理学において、ポルトマンが生物学において、明示するものにかかわるからである。当時隆盛を極めた行動主義が一顧だにされないのは、行動主義の予測可能性がそもそも過去の延長としての未来という、旧来の時間概念に囚われているからである。

（四）「パースペクティヴな」意識が既存の合理化・抽象化作用を通して生み出す「世界表象」（Weltvorstellung）は真の新しさをもたらすことはできない。また新たな「世界像」（Weltbild）や「世界観」（Weltanschauung）を持ち出したとしても、それらは「世界表象」の克服ではなく、神話的段階ないしは魔術的段階への退行にすぎない。（2, 33）

（五）　エーリヒ・ノイマンの『意識の起源史』が意識一般の、誕生から現在に至る発達の歴史を扱うのに対し、ゲプサアは現在から未来に向かって開かれている可能性を吟味するために、西欧的意識の発展史、さらにはそれを包括する人類の意識の発展史を再構成する。

（六）　テイヤール・ド・シャルダン著作集1　『現象としての人間』（美田稔訳）一九頁　みすず書房　一九六

九年

（七）　西洋の技術が外界の支配に用いられるのに対し、東洋の技術は内面の統御に使われる。東洋の技術を支える論理は、不合理を厭わぬ「あれもこれも」思考だが、ゲブサアは西洋人が最も嫌うこの神話的思考形式に、ニールス・ボーアの相補性原理を援用することで近づこうとしている。講演「人間の技術への関係における変化」（5-2, 19ff.）参照。西洋と東洋の相補性については、『アジアの異なる微笑』第九章「西と東の補完」（6, 108ff.）を参照。

（八）　ケン・ウィルバーは「意識のスペクトル」という複層構造を提示するが、「パースペクティヴな」空間意識の視点に立っており、ゲブサアの思想とは異なるというべきであろう。意識のスペクトル層の違いはアイデンティティが領する範囲の大きさの違いと捉えられている。最小のアイデンティティであるペルソナの段階から、自己と非自己が完全なひとつの全体を形成する統一意識という究極の境位まで、違いをもたらすものは領域の「境界線」である、という。ケン・ウィルバー『無境界』（吉福伸逸訳）一八頁以下　平河出版社　一九八六年ゲブサアの米国への影響については、以下の書を参照。Consciousness and Culture: An Introduction to the Thought of Jean Gebser. Edited by Eric Mark Kramer. Westport, Conn. Greenwood Press 1992.

（九）　ゲブサアは、ディルタイを生の哲学者とみなし、かれの歴史的理性批判を評価しない。先述したように、ゲブサアはディルタイの重視する「体験」を魔術的段階に位置づけている。（2, 343ff.）「アパースペクティヴな」段階においても「パースペクティヴな」意識の本質である対立や二元性は否定されることなく、主客の分離は残る。ヴェルナー・ハイゼンベルクが古典力学と量子力学をめぐって、あるカント哲学者と交わし

た対話は、ゲプサアが「透徹」と呼ぶ新たな意識の境位を活写している。ハイゼンベルクは、量子力学が古典力学的な因果律に従わないとしても、古典力学が否定されるわけではないことを力説している。両者は交り合わないが、重なっている。主客を対立させる意識の枠組みは古典力学に相応しいものであったが、「歴史の発展とともに人間の思考の構造も変わる」のである。Quantenmechanik und Kantsche Philosophie. In: Werner Heisenberg, Quantentheorie und Philosophie. Vorlesungen und Aufsätze. Hrsg. von Jürgen Busche. Stuttgart 1979.

（一〇） 東洋と西洋の出会いが注目された「コルドバ国際シンポジウム」（一九七九年）を頂点として、西洋はその後、ゲプサアの愛した詩人ヘルダーリンの表現を借りるならば、「ヘスペリアのユーノー的冷静」に戻っていったようにも見える。ジャン・ギトンによる超実在論のクレドには、それがはっきりと感じられる。ジャン・ギトン、グリシュカ・ボグダノフ、イゴール・ボグダノフ『神と科学』（幸田礼雅訳）新評論　一九九二年

（一一） ゲプサアは、リルケを過去の神秘主義に引きつける退嬰的解釈を斥けている。リルケが開示する存在連関は、時代に先行する新たな意識の所産であり、それはヴァレリー、カフカ、トラークルら同時代の文学者に共通する、形容詞の画期的な統語法に刻印されているという。（1, 40）『根源と現在』序文によれば、着想は一九三二年に遡るという。（2, 16）

（一二） ゲシュタルト心理学が明らかにしたように、私たちの視覚は三次元の世界を網膜という二次元平面に投影された図像から再現している。ここに錯視が生じる。たとえば「マッハの本」。立てた本の表紙を見ているのか、それとも中の書面を見ているのか。二つの平行四辺形の輪郭線という、ごく限られた二次元の情

報からは決定することができない。同様に、たとえ四次元の時空間に関する情報が、いわゆる「超感覚的知覚」として私たちに伝えられているとしても、それが因果律を構成するほどの確度をもたないことは、日常経験の示すところである。超心理学の実験がはかばかしい成果をあげえない理由もここにある。ゲブサアが超心理学に好意的な関心を抱いていたことは、かれの思想家としての評価を保留する要因になっているといってよいだろう。しかし神秘主義やオカルトへの安易な退行を繰り返し批判していた事実にかんがみるならば、超心理学をめぐる事態が明らかになったのが、かれの死後であったことは不運といえるかもしれない。